

青少年の薬物乱用問題におけるコーピングの検討

増田 由依

<問題と目的>

薬物乱用にはストレスや不適切なコーピングが関連していることが明らかにされている (Kaplan, et al., 1986; Wills & Shiffman, 1985). 一方, コーピングの分類には「問題—情動次元」, 「接近—回避次元」, 「認知—行動次元」という3つの次元が存在するが, 従来の研究を概観すると青少年の薬物乱用問題においても, この3つの次元が必要であると考えられる. しかし, 青少年のコーピングを3次元から捉えられる尺度は存在せず, 詳細な検討は困難である. したがって, 本研究では研究1で青少年のコーピングを3次元から捉えられる尺度を作成した上で, 研究2として, 薬物乱用問題とコーピングの関連を検討することを目的とする.

<各研究における結果と考察>

研究1: 中学生508名と高校生444名を対象として, コーピングを3次元から捉えることが可能である尺度, 「TAC-24 (神村他, 1995)」の中学生・高校生版を作成した. 本尺度は情報収集 (EPB), 放棄・諦め (APC), 肯定的解釈 (EEC), 計画立案 (EPC), 回避的思考 (AEC), 気晴らし (AEB), カタルシス (EEB), 責任転嫁 (APB) の8因子24項目から成立している. 信頼性に関して, 再検査法は中学生 (N=260) において $r=.43\sim.64$, 高校生 (N=399) において $r=.45\sim.68$ であり, Cronbachの α 係数は中学生 (N=507) において $\alpha=.60\sim.75$, 高校生 (N=444) において $\alpha=.61\sim.80$ であった. 妥当性に関して, 確認的因子分析を行ったところ, 成人と同様の8因子に収束した. また, 3次元モデルを構築し共分散構造分析を行ったところ, 中学生, 高校生の両方において適合度が良好であるモデルが成立した. 以上のことより, TAC-24中学生・

高校生版は信頼性と妥当性が確報された尺度であり, さらに, 3次元から青少年のコーピングを捉えることが妥当であることが示された.

研究2: グレーゾーン (薬物乱用予備軍) におけるコーピングと薬物関連要因の関係において, 中学生はAPCやEEBがアサーション能力を予測すること, 高校生においてはEPBやEEBが喫煙経験や大麻の入手可能性を予測することが示された. さらに, 友人関係のストレスとAPC, 集団生活および日常生活に関するストレスとEPCに交互作用が認められた. また, 教師に関するストレスは, 全てのコーピングにおいて有意な主効果が認められた. 以上のことより, コーピングとストレスの交互作用, 主効果がグレーゾーンに関連していることが示された.

まとめ: TAC-24中学生・高校生版はコーピング構造を詳細に把握することが可能であるため, より具体的な治療計画を立てる際に有効であると考えられる. さらに, 3次元のコーピングとストレスの交互作用や主効果を考慮することで, グレーゾーンへの関連を低減させうる可能性が示唆されたと考えられる.

<引用文献>

神村栄一・嶋田洋徳・鈴木敏城・國分康孝・坂野雄二 (1995). 高校生におけるコーピングとその学校ストレス低減効果日本カウンセリング学会第28回大会発表論文集, 144-145.

Wills, A. T., & Shiffman, S. (1985). Coping and substance use: A conceptual framework In S. Shiffman & T. A. Wills (Eds), *Coping and Substance Use*. New York: Academic press, 3-24.